

れきみん となん歴民だより

vol.82

令和7年9月30日発行

盛岡市都南歴史民俗資料館

■企画展「収蔵書画展」を開催しています

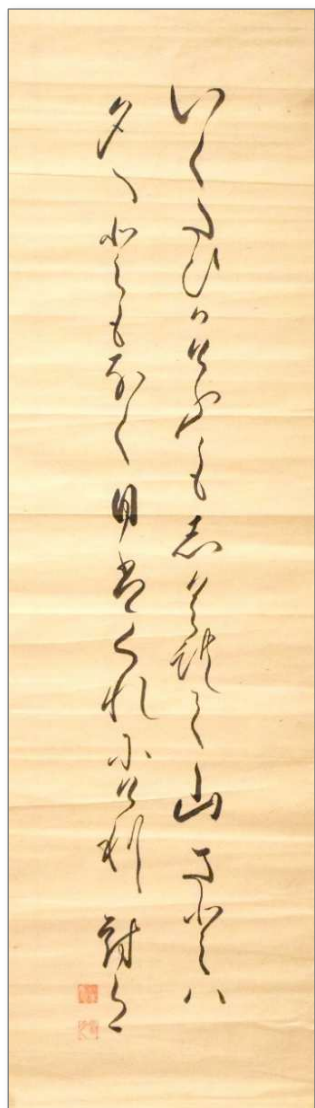
都南歴史民俗資料館では、11月16日(日)まで企画展「収蔵書画展」を開催しています。

資料館に保管された数多くの書や絵画作品を一挙に展示しています。掛け軸や額に仕立てられていない作品、破れてしまった作品など、保存状態は決して良いとは言えず、美術品的価値も高いと言い切ることはできませんが、郷土盛岡ゆかりの人物から名もなき書家・画家まで、素朴な味わいを気軽に楽しめます。



作者不詳[署名:雅堂漁夫] 鴨図屏風(部分)

◆企画展資料より — 葛原対月 書 —



いくたひか けふもしくれて 山さとは
夕へともなく 日はくれにけり 対月

左は龍谷寺(盛岡市名須川町)住職などをつとめた僧、葛原対月の書です。対月は歌人でもあり、また日本を代表する歌人石川啄木の伯父にあたります。

葛原対月は文政9年(1826)、盛岡藩士工藤条作の二男として現在の盛岡市仙北町に生まれ、幼名を勇次、長じて直季と名乗りました(本文中では対月の名で統一します)。対月は武術に長け、和漢の書を修め、和歌の道にも茶道にも通じた多才な人物でしたが、仕官を好まず静かな場所に道場を設け門弟たちに武術や学問を教えていました。

仏門に入るきっかけは妻の死でした。世に無常を感じた対月は出家し修行を積み、住職として大泉院(八幡平市平館)に赴任しました。ここで平館村出身の石川一禎と出会います。一禎は対月のもとで、仏道だけでなく短歌も学びました。

明治4年(1871)、対月は盛岡の龍谷寺に住職として赴任しました。彼を慕う一禎も同寺に移り、そこで寺の家事手伝いに来ていた対月の妹カツと出会い、一緒になりました。やがて一禎は常光寺(盛岡市日戸)の住職に抜擢され、明治19年(1886)には長男が誕生しました。これが後の石川啄木です。啄木は龍谷寺を訪ね伯父対月から詩歌の手ほどきをうけたと伝わっています。

対月は明治28年(1895)に常光寺(青森県上北郡野辺地町)へ移りますが、その後も僧として歌人として活動しました。

早くから「柴の庵」を号として用いた対月ですが、左の作品にも「柴庵」の印が押されています。

歌人啄木を育んだ土壌を考えるうえで、一禎一家を生涯導いた対月は欠かせない存在です。

主な参考文献: 岩城之徳『人物叢書 新装版 石川啄木』1985、吉川弘文館
浦田敬三『啄木その周辺—岩手ゆかりの文人』1977、熊谷印刷出版部

盛岡藩は、元禄・宝暦・天明・天保の四大飢饉で多くの餓死者を出しました。盛岡の祇陀寺の天然和尚は、飯岡山が昔から神様や仏様のいわれある場所で、その山腹には仏像に似かよった奇石があることを思い出し、その石で亡くなった人々を弔いたいと考えました。そして、盛岡藩内で喜捨修行をし、その浄財で工事にとりかかりました。

飯岡山から安山岩を切り出し、仙北町の長松寺で石工らが3年かけて荒刻みをし、町の人々が北上川を舟で渡して祇陀寺の末寺である宗龍寺まで運びました。そこで仕上げを行い、完成したのが十六羅漢という16体の仏様と五智如来という5体の仏様でした。仏像をつくりはじめて13年目のことです。天然和尚は完成を見ることなくすでに亡くなっており、弟子の長松寺泰恩和尚がその志を引き継ぎ完成までこぎ着けました。

現在、その場所は公園として市民の憩い場へと姿を変えています。

参考：都南村歴史民俗資料館『都南の民話』1985年
盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』2008年

ゆかりの地 ^{らかん} 児童公園

かつてこの地に祇陀寺の末寺宗龍寺があったが、廃寺ののち火事で焼失した。現在は盛岡市指定有形文化財の石造十六羅漢と五智如来がその名残をとどめている。



盛岡市茶畑二丁目1
岩手県交通バス停「松尾前」下車すぐ

== 見て さわって 動かして 深まる学習 ==

～昔のくらしを知る 盛岡市都南歴史民俗資料館の貴重な収蔵品～

★令和7年度 第2回 「^{いろり}囲炉裏」

江戸時代まで、民家には瓦を使ってはならないとの定めがありました。そのため、ほとんどの家の屋根は茅をはじめとする草葺きでした。都南地域にも昭和の終わりころまで茅葺きの家がありました。

茅葺きの家になくてはならないものが囲炉裏です。囲炉裏の多くは台所、あるいは勝手と呼ばれる部屋の土間寄りに設けられます。床を掘り下げ炉縁板をはめ込み、中に灰を敷き中心で火をおこします。囲炉裏は、炊事、暖房、照明、屋根の燻蒸と多くの役目を果たし、一家だんらん、家の精神的な中心でもあり、特に家父長制が強かった時代は重要な場所でした。

当館には、囲炉裏とそれに関連する道具が展示されています。現代と比べればもちろん不便はありますが、多くの役割を囲炉裏一つで行っていたというのは非常に合理的であったと言えます。ぜひ当館に足を運んでいただき、昔の人々の生活に思いを馳せてほしいと思います。

参考文献：岩井宏實『日本の生活道具百科』河出書房新社2002

